

論 説

商品流通と恐慌の抽象的可能性

—『資本論』第I巻第3章第2節の解明—

頭 川 博

はしがき—問題の所在、

- 一 交換過程に内在する矛盾
 - 二 貨幣形成と恐慌の抽象的可能性
 - 三 恐慌の抽象的可能性と古典派経済学
 - (一) 古典派学説と部分的過剰生産
 - (二) 恐慌の抽象的可能性と古典派学説の再版
 - 四 商品変態の正常的経過と恐慌の抽象的可能性
- む す び

はしがき—問題の所在

商品流通 $W-G-W$ に含有される販売 $W-G$ と購買 $G-W$ との分離の可能性は、全般的過剰生産を根本現象とする恐慌が発生するための論理的前提である。もし商品交換が直接的生産物交換 $W-W$ の形態をもって行なわれ販売と購買とが無媒介的な同一性をもつとすれば、全般的過剰生産恐慌は本来的にありえず、或る部面での過剰生産と別の部面での過少生産とから成る単純な部分的過剰生産が発生するにすぎない。だから、商品流通それ自身が「恐慌の一般的な抽象的な可能性」(*Mehrwert*, II, S. 510)を形成する。「商品の変態の一般的性質は—一般的供給過剰の可能性を排除するのではなく、購買と販売との統一を含むのと同様にその分離をも含んでおり—、むしろ、一般的供給過剰の可能性なのである。」(*Ibid.*, S. 505, 圏点—マルクス)そこ

で、さしづめその恐慌の抽象的可能性に着目すれば、以下のようなごく単純素朴な疑問が生まれるのである。すなわち、恐慌の抽象的可能性つまり販売と購買との分離の可能性に関する第一の疑問は、それが交換過程の矛盾と如何なる内在的な関係にあるのかということ、これである。というのも、恐慌の抽象的可能性は、商品変態 $W-G-W$ そのものに内蔵され、 $W-G-W$ は交換過程の矛盾が貨幣形成によって解決される運動形態をなすから、恐慌の抽象的可能性の母胎は、交換過程の矛盾にこそあると推論されるからである。通例、恐慌の抽象的可能性は、貨幣が価値の独立的な姿態である事実から説かれる。つまり、販売によって得られる貨幣は直ちに購買に出勤する心然性がなく一時的な休止点を形成する事実によって、 $W-G$ と $G-W$ との分離は説明される⁽¹⁾。しかし、これだけでは、恐慌の抽象的可能性がすでに相互に独立した二つの契機である $W-G$ と $G-W$ とから構成される商品流通を直接前提として引きだされる点で、表面的な説明といわねばならない。なるほど、恐慌の抽象的可能性に関する通常の説明は、どの販売 $W-G$ も反面で購買 $G-W$ であるから、商品流通では販売と購買とは必ず均衡するという「購買と販売との形而上学的均衡」(*Kritik*, S. 78) の主張に対する批判としては、それだけで完璧である。けだし、 $W-G-W$ こそ商品の完結的な姿態変換をなし、販売 $W-G$ は単に商品の完全な変態の第一段階の完了を意味するにすぎないからである。しかし、恐慌の抽象的可能性は、 $W-W$ の $W-G-W$ への転化それ自体に起因するのに反して、J. B. Say (1767-1832) の説く販路説に対する批判論点は、単に商品変態の十全な姿が $W-G-W$ だというその理解でもって成り立ち、恐慌の抽象的可能性を含蓄する $W-G-W$ への $W-W$ の必然的転化を規定する交換過程の矛盾には触れないのである。そもそも恐慌の抽象的可能性は、商品生産という特殊歴史的な生産形態に特有な矛盾の表現にほかならない。従って、商品生産の内奥に潜む特有な矛盾とその表現である恐慌の抽象的可能性との内的な結びつきを解かない限り、一見内在的統一だけがあるかに見える商品流通が、なにゆえ分離する可能性をもつかという疑問には説得力ある回答が与えられないのである。マルクスの規定する通り、「恐慌の最も抽象的な形態(したがってまた恐慌の形式的な可能性)

は、商品の変態そのものである」(Mehrwert, II, S. 510, 圏点—マルクス)から、恐慌の抽象的可能性は、商品変態そのものから一步踏みこみ、交換過程の矛盾との秘匿された関連を明確化して初めて、商品生産の固有な矛盾の表現として確定されるのである。先回りしていえば、貨幣が価値の独立的な姿態である事実それ自体、実は、 $W-G-W$ においては一方の商品の使用価値と価値との同時実現が他方の商品のそれとは別個に可能になるという交換過程の矛盾解決の反面にすぎないのである。恐慌の抽象的可能性が商品生産に固有な矛盾の発現形態だという事実は、交換過程の矛盾との関連の析出によって初めて検証されるように思われる。従って、貨幣が商品変態の一時的休止点を形成するという事実から、 $W-G-W$ の分離を説くだけでは、なにゆえにその分離が根源的に生まれるのかという問題に対する積極的説明にはならず、商品変態を規定する交換過程の矛盾との関連をつけてのみ、恐慌の抽象的可能性を商品生産特有の矛盾の発現形態として規定できることになる。しかし、われわれの包括的なサーヴェイによれば、全面的商品交換の矛盾の解決方法から恐慌の抽象的可能性を根拠づけた信服に落ちるポジティブな証明は、従来遺憾ながら構築されていない。

恐慌の抽象的可能性に関する第二の疑問は、 $W-\dot{G}-W$ の中間項の G をもって商品交換の媒介物ととらえる古典派経済学の考え方によれば、なにゆえに全般的過剰生産は否定され部分的過剰生産のみが肯定されることになるのかということ、これである。というのも、古典派は、欲望対象の不一致による交換行為の不成立こそいわば全面的交換の矛盾とみなす理解から貨幣をもっぱら流通手段としてのみ把握したが⁽²⁾、貨幣が流通手段機能を果たすことによって成り立つ商品変態それ自身の中にこそ恐慌の抽象的可能性は伏在するのだから、交換の媒介物としての貨幣把握から直線的にその否定論を導くことは理論上の脈絡からいって不可能だからである。ところが、古典派による全般的過剰生産の否定論と恐慌の抽象的可能性理解とは不可分の関係にあるのに反して、全般的過剰生産の否定理由については貨幣をもって商品交換の一時的な媒介物とみなす古典派の欠陥指摘という通り一遍の根拠説明が与えられるにすぎない貧弱な現状にある⁽³⁾。もし古典派による全般的過剰生

産の否定の根拠づけに不明確さが残るとすれば、それはとりもなおさず恐慌の抽象的可能性それ自体の曖昧な理解を表わす。われわれの推論するところ、古典派による部分的過剰生産の肯定論は、本質的には全面的商品交換に内在する矛盾の理解のゆがみに由来する。古典派とマルクスとの間の恐慌の抽象的可能性に関する相違は、両者間での全面的交換の矛盾把握の差異が浮き彫りになれば、おのずから明確になるはずである⁽⁴⁾。その意味で、全面的交換に内在する矛盾の解決と恐慌の抽象的可能性とは唇齒輔車の関係にある。

それゆえに、本稿の課題は、恐慌の抽象的可能性の根源的な発生根拠を交換過程の矛盾から内在的に解く半面で、古典派による全般的過剰生産の否定の根拠づけをマルクスの定立した交換過程の矛盾に照らして掘り下げることである。交換過程の矛盾と恐慌の抽象的可能性との関連づけによって、商品変態の正常的経過の前提上でなお外観上それと抵触するかに見える恐慌の抽象的可能性を指定したマルクスの真意もまた解決することになる。

- (1) たとえば、その一例として F. Oelssner, *Die Wirtschaftskrisen*, Berlin, 1953, Kap. 2 (邦訳『経済恐慌』大月書店)を見よ。
- (2) 「生産物はつねに生産物によって、あるいは勤労(service)によって、買われる。貨幣はたんに交換を果たすための媒介物 (medium) にすぎない。」(D. Ricardo, *Principles, Works, I*, pp. 291-2)
- (3) 相原茂氏は、『剰余価値学説史』第II巻第17章「リカードの蓄積論 その批判」にならって、リカードにおいては価値の質的規定の欠如が価値形態の無理解を生み、価値の独立した形態としての貨幣の理解を阻み、結局 W-G-W の統一的側面のみを強調させる羽目に陥らせたとその限りでは正当に主張される(『蓄積と恐慌』角川書店, 1949年, 104-5 ページ)。しかし、これだけでは古典派が全般的過剰生産の否定に走った理由づけとして必ずしも万人を納得させる力をもたない。けれど、W-G-W の G は古典派にとって商品とは相異なる流通手段としての貨幣として存在するのであるから、「価値形態の無理解」(105ページ)とか「貨幣に関する誤った観念」(同ページ)が如何に W-G-W の一面的理解と結びつかを突っこんで説明しない限り、恐慌の抽象的可能性についての従来の説明のように、古典派においても貨幣の一時的な休止をいえば販売と購買との分離は成り立つことになるからである。ただし、相原氏の指摘は、古典派がなにゆえに部分的過剰生産の主張者に留まったかをより踏みこんで全面的交換の矛盾から根本的に考えるという奇貨を与えてくれた。

- (4) 高木彰『恐慌・産業循環の基礎理論研究』（多賀出版、1986年）111—36ページには、すでに恐慌の抽象的可能性をもって商品生産に特有な矛盾から説明して初めて古典派の狭隘な射程を突破できる旨の慧眼な発言がある。

一 交換過程に内在する矛盾

はしがきで主張したように、販売と購買との分離に示される恐慌の抽象的可能性は、商品生産という特定の生産形態に独自の矛盾のクリティカルな表現様式であるから、商品生産になにゆえ恐慌の抽象的可能性が必然的であるかは、生産物が商品として運動する交換過程の矛盾とのつながりを考察してのみ根源的に把握されうる。そこで、本節では、生産物が使用価値と価値との二重物たる商品として独自に運動する部面をなしその商品の形態運動から貨幣を生み出す交換過程の矛盾を、マルクスが展開したその第一規定から第三規定へと上向的に分析する。

貨幣結晶は、労働生産物が互いに商品として相対する交換過程の不可避的な産物であるとマルクスが規定するように(*Kapital*, I, S. 102)、交換過程に内在する矛盾は、極限にまで発展して恐慌の抽象的可能性を含有する商品と貨幣とへの商品の二重化を生み出す。ところが、『資本論』第1巻第2章「交換過程」で説かれる全面的商品交換の矛盾は、従来祖述の域を脱却しない研究の空白部分をなすばかりか、第1巻第3節「価値形態または交換価値」との間に断絶をもって理解され、事実上マルクスの貨幣形成論をA. スミスと同じ学説とみなす見解も少なからず散見される貧困な現況にある。私見に従えば、交換過程論の隅石 (cornerstone) は、商品の価値としての実現という概念にある。価値としての実現という概念を誤まれば、マルクスをスミス学説と二重写しにみる偏った解釈がストレートに発生することになる。全面的交換の矛盾がスミス流の欲望対象の不一致による交換行為の困難とみなされる際の隘路は、商品の価値としての実現という概念の取り違えにある。それでは、生産物が使用価値と価値との二重性格をもつ商品として運動する交換過程に内在的な矛盾とはいったい何か。

商品とは本質的に使用価値と価値との二重物であるから、労働生産物の商品としての持ち手交換に際しては、商品は、使用価値としての社会的有用性ととも凝固した抽象的人間労働としての普遍的妥当性を同時に実証しなければならない。労働生産物が商品である限り、対象化された具体的有用労働が社会的分業の公認された一環であるとともに、抽象的人間労働としての一般的性格が公的に認知されて初めて、生産物交換は商品としての持ち手交換たる資格要件を具備することになる。使用価値としての社会的有用性と抽象的人間労働としての普遍的性格の同時的な確認は、労働生産物の商品としての交換の二大基本要件にほかならない。交換過程に内在する矛盾を考える際には、「商品は、ただそれが二重形態すなわち現物形態(Naturalform)と価値形態(Wertform)をもつかぎりでのみ、商品として現われる(erscheinen)」(*Kapital*, I, S. 62) という第1章第3節劈頭の一文が拳拳服膺されるべきである。或る商品の別の商品の使用価値による価値形態の取得は、交換過程で相対する商品同士の間では、二商品の異質な現物形態そのものが抽象的人間労働の塊として完全な質的同一性をもつ特有な関係を基礎に成り立ち、交換部面でのその価値形態の成立によって、或る商品に凝固した労働は、抽象的人間労働たるその本質的性格を普遍的通用性のある社会形態で表現することになる。そこで、マルクスは、「商品に内在する矛盾(der in der Ware liegende Widerspruch)」(*Mehrwert*, II, S. 502)の交換過程上での現われを順を追って展開するその第一規定で、商品の持ち手の取り替えの必然性をのべたあと、次のようにいうのである。「商品の交換が商品を価値として互いに関係させ、商品を価値として実現するのである。それゆえ、商品は、使用価値として実現されうるまえに、価値として実現されなければならないのである。」(*Kapital*, I, S. 100) ここで、交換過程における商品同士の関係は、商品所有者と商品との関係と違って、もっぱら使用価値のもつ社会的有用性には無関係な価値関係つまり抽象的人間労働としての同等性関係である事実から、異質な現物形態をもつ諸商品は、商品交換に際しては外面上の相違に反して、その現物形態のまま価値としての同一性関係に立ち、抽象的人間労働としての普遍的通用性を確認しあうのだとマルクスは先ずもって主張する

のである⁽¹⁾。そして、交換過程上での商品同士の関係は、異質な現物形態がそのまま凝固した抽象的人間労働として完璧な同等性をもつ価値関係である限りでは、使用価値と価値との二重物である商品は、その使用価値の社会的有用性の他者による確認以前に、抽象的人間労働としての社会的通用性を最初に実証すべきだと規定しているのである。フランス語版『資本論』には「商品は、使用価値として実現されうる前に、価値として表現されなければならない」(*Le Capital*, 1872-75, p. 35) という刮目すべき言い換えがある事実を斟酌すれば⁽²⁾、商品の価値としての実現とは、商品の価値形態の取得による抽象的人間労働としての普遍的妥当性の実証を表わすことは確定的といつてよい⁽³⁾。ところが、商品は、その有用な使用価値と価値形態とをもつ限りでのみ名実相伴うが、その使用価値が社会的に有用である限りで、そこに対象化された具体的有用労働は、交換過程で相対する別の商品の具体的有用労働との等置関係の中で両者の異質性が客観的に捨象され、抽象的人間労働に還元されるにすぎないのである。従って、他方において、商品は、対象化された抽象的人間労働の普遍的通用性を実証する以前に、あらかじめ使用価値としての社会的有用性を実証しなければならないことになる。しかし、商品は、使用価値の有用性を実証すると同時に価値形態を取得してのみ二重的性格をもつ商品として社会的公認を受けとるのに反して、商品を価値として実現する交換行為のみが、反対にまた、使用価値としての有用性を証明する資格要件をもつ。そうだとすれば、商品交換とはさしあたり先ず商品同士の価値関係だから、商品は価値として実現されねばならないが、つまるところ価値としての実現以前に使用価値としての実現の必要がある半面、使用価値としての実現以前に価値としての実現の必要があるのだから、同時達成されるべき商品の二重的本性の実証は背反関係に立つことになる。商品の使用価値としての実現と価値としての実現とは相互排除関係にある。

それでは、一商品についての使用価値と価値との相互に矛盾した実現関係は、それぞれの商品がそれ以外の多数商品と相対する交換行為の総和から構成される全面的商品交換関係の中では、如何なる発展的な姿をとるのであろうか。これを分析したのが交換過程の矛盾の第二規定である。『資本論』第I

巻次元上では価値通りでの商品の販売の想定がおかれ、社会的総労働の各生産部門への均衡的な配分が前提されている事実と異論は存在しない。ところが、社会的総労働のバランスのとれた配分という想定のもつ含意に関しては、意見は真つ二つに分かれる。われわれの見解に従えば、社会的総労働の均衡的な配分の想定とは、交換過程論次元上では、すべての商品所有者にとって欲望対象が合致する事実を表わす。ただし、「社会的欲望(ここではつねに支払能力ある欲望のことである)」（*Kapital*, III, S. 190）というマルクスの規定通り、商品経済での社会的に通用性をもつ欲望とは支払能力の裏づけをもつ欲望であるが、たとえ生産物を所有するとしても、欲望対象の一致がない限り、その所有者の社会的欲望は効力をもたず、事実上欲望対象の不一致は社会的総労働の不均衡配分という事態と同じになるからである。そこで、先ず一商品とそれ以外の多数商品との交換関係を使用価値としての実現の面からみれば、その一商品の所有者はみずからの商品を自己の欲望を満たす使用価値をもつ商品と交換するのだから、その交換関係は、商品所有者が互いに欲する特殊な使用価値と特殊な使用価値とが置き換わるという点で個人的な過程である。全面的交換の矛盾の第二規定で、マルクスによれば、商品所有者が自分の欲望を満たす使用価値をもつ別の商品と引き換えにのみ自己の商品を譲渡するというのは、欲望対象の不一致による交換成立の困難性を指摘したものでは全然なくて、価値としての実現に対比してみた使用価値としての実現の差別性をのべたものである。他面、一商品とそれ以外の多数商品との交換関係は、両者の異質性に無頓着でどの現物形態もそのまま価値としての質的同一性をもつ価値関係にほかならず、どの商品も抽象的人間労働の様な凝固として任意に置き換え可能だという点で⁽⁴⁾、一般的な社会的過程である。ここで、マルクスによれば、自己の商品の使用価値の社会的有用性に関係なく自己の商品を同一価値をもつ任意の他商品で価値として実現するというのは、異種の商品間での価値としての同等性関係が使用価値としての異質性の事実上の捨象の上に成り立つからである。そこで、使用価値としての実現と価値としての実現という対照的な面からみた一商品とそれ以外の多数商品との交換関係を突き合わせてみれば、個人的過程である使用価値としての

実現と一般的な社会的過程である価値としての実現とは、同時に重なり合う。つまり、任意の一商品とそれ以外の多数商品との交換関係にあっては、その同じ交換関係が個人的過程であると同時に一般的な社会的過程でもある。ところが、すべての商品所有者にとっては、個人的過程と一般的な社会的過程とは同時に成立しないのである。全面的商品交換関係の中では、使用価値としての実現と価値としての実現とは互いに排除関係に立つ。たとえば、いま種類を異にする諸商品が $X_1 \cdot X_2 \cdots X_n$ まで存在して、それぞれの商品がそれ以外の多数商品ともれなく多角的に交換されるものと想定しよう。そうすれば、任意の一商品 X_1 とそれ以外の多数商品との交換関係に限定してみれば、使用価値としての実現と価値としての実現とは完全にオーバーラップする。ところが、すべての商品についてみれば、使用価値としての全面的実現が達成される前提上では、価値としての全面的実現は絶対的に否定される。反対に、全面的な商品交換の中で、価値としての全面的実現が達成される場合には、使用価値としての全面的な実現は必ず覆される。上例と同じく X_2 から X_n までの諸商品が X_1 と相対している交換関係をみれば、ここで X_2 から X_n までの諸商品にとっては価値としての全面的実現は達成されるが、 X_2 から X_n までの諸商品と X_1 との交換関係は使用価値としての全面的実現関係の一構成部分にすぎず、使用価値としての全面的実現は成り立たないのである。従って、使用価値としての全面的実現と価値としての全面的実現との二つの契機は、相互に相手方をしりぞける矛盾の関係にあるということになる。それゆえ、交換過程に内在する矛盾の第一規定と第二規定とを小括すれば、一商品について相互排除関係に立つ使用価値と価値との実現関係は、全面的商品交換の中では、一方の全面的実現の達成が他方の全面的実現の達成を排除する関係として発展的に具体化される⁽⁵⁾。

ところで、以上で展開した交換過程の矛盾の第二規定を別の観点から見直せば、全面的交換に内在する矛盾は、どれか一商品が一般的等価形態の位置を占めるべきであるのに反して、すべての商品がそこから除外される相互排除関係に最終的に帰着する。交換過程の矛盾の第二規定において、その一方の契機である価値としての全面的実現とは、任意の一商品以外の多数商品が

その一商品の使用価値をもって一般的な価値鏡とする関係である。だから、価値としての全面的実現とは、価値形態論に即して表現すれば、諸商品のうちどれか一商品が専一的に一般的等価形態の位置に君臨する関係として翻訳される。ところが、他方の契機である使用価値としての全面的実現とは、それが異質な現物形態をもつ商品同士の交換関係である限りでは、どの商品も一般的等価形態に立とうとして相互に反発しあい、そこから例外なく除外される関係である。従って、全面的商品交換の矛盾は、一方の価値の本性からすれば、どれか一商品が一般的等価形態に立つべき使命をもつのに反して、他方の使用価値の面からみれば、どの商品も一般的等価形態から反発される相互排除関係という究極的な展開規定を受けとる⁽⁶⁾。因みに、全面的交換の矛盾にあつて、どの商品も一般的等価形態から除外され、その矛盾のうち価値としての全面的実現という一方の契機が達成されないならば、使用価値としての全面的な実現（＝生産物の全面的な交換）という他方の契機だけが成り立つことになる⁽⁷⁾。マルクスによれば、全面的商品交換にあつてすべての商品が一般的等価形態から同等に除外される限り、商品としてではなく使用価値としてのみ相対するにすぎなくなるというのは、価値としての全面的実現が達成されない場合には、使用価値同士の全面的な交換関係という全面的商品交換関係のもつ一面だけが成り立つということにほかならない。だから、全面的交換の矛盾それ自体は、少しも直接的に使用価値同士の全面的交換関係の不成立を意味しない。全面的交換の矛盾をもって単純にも交換過程の全面的な行き詰まりと結論するのは筋違いである⁽⁸⁾。全面的商品交換の矛盾が使用価値同士の交換の不成立を直接表わすとすれば、諸商品は使用価値としても相対しないことになる。

以上、れわれは、本節において、価値としての実現という概念を旋回軸にして、全面的交換に内在する矛盾をマルクスの三段階にわたる発展的な規定に即して具体化した。

- (1) 本文での引用文が示すように、交換過程は相異なる商品を互いに価値関係の中に設定して価値形態を与えるのである。従って、先ず第一に、「価値形態に

- あつては…交換関係の場合と異なり、等価形態に立つ商品は観念的存在にすぎない」(鈴木鴻一郎『マルクス経済学』弘文堂、1955年、39ページ)というのは、『資本論』からの逸脱である。第二に、交換過程では異質な商品同士が対等平等な資格で価値として関係しあい価値表現するのであるから、相異なる使用価値がその現物形態のままでも等価物という同等性関係に立つことそれ自体が、他方の商品の使用価値による一方の商品の価値表現を与えるのである。A商品=B商品という価値関係に置かれた二商品の等号(=)は、本源的には等価物としての両者の対等な資格での同等性関係を表わす。以上の二論点について詳しくは、拙稿「価値形態の秘密とは何か」『高知大学学術研究報告(社会科学)』第33巻、1984年、を見よ。
- (2) 価値としての実現という概念が価値表現を示すフランス語版『資本論』以外での用例については、拙稿「全面的交換に内在する矛盾」『高知論叢』第22号、1985年、第一節注(1)を参照。
- (3) 或る商品は他人にとって使用価値をもつ半面、その所有者にとって交換価値の担い手であるという事実から、商品の持ち手の取り替えの必要性を引きだし、続いて使用価値としての実現のまえの価値としての実現の先行性を規定するという順番で、マルクスは交換過程の矛盾の第一規定を叙述しはじめる(*Kapital*, I, S. 100)。そこで、商品が他人にとってとその所有者にとっても二重の意味をそれぞれ使用価値としての実現と価値としての実現とに対応させ、価値としての実現をもって交換価値の担い手としての自己の商品と引き換えでの相手方商品の獲得と理解する考え方が一部で見られる(たとえば久留間鮫造『貨幣論』大月書店、1979年、236-9ページ)。しかし、使用価値としての実現にせよ、価値としての実現にせよ、ともに同一の商品交換を基本要件とするから、価値としての実現のみをもって自己の商品と引き換えで自分の欲望を充足させる商品を取得する関係とみなす意見は理屈に合わない。自己の商品が他人にとって使用価値をなしその所有者にとって交換価値の担い手だというのは、単に商品の持ち手交換の必然性を規定したものにすぎない。
- (4) 「交換のための商品の定在は、交換価値としてのその定在である。」(*Kritik*, S. 29) 「単なる使用価値としては、諸商品は相互にとってどうでもよい存在である。」(*Ibid.*, S. 30)
- (5) 思うに、学界の一部で全面的商品交換の関係における欲望対象の不一致がことさら強調される根源には、仮に欲望対象の一致が全面的に成り立てば、全面的な商品交換は遺漏なく達成されると考える揣摩憶測がある。しかし、欲望対象の全面的一致を想定しても、実は全面的な商品交換はそれだけでは成立しないのである。なぜならば、欲望対象の一致は単に商品の使用価値としての実現を意味するだけで価値としての実現を表わさず、商品は使用価値と価値との二重物として公認される社会的条件をもたないからである。

- (6) 久留間鮫造氏は、等価商品をもって観念的な存在とみなす一方(『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年、99ページ)、マルクスにならって拡大された価値形態の逆転に際しては交換過程を密輸入され、一般的価値形態の成立をいとも簡単に主張される(『貨幣論』[前掲]、139-43ページ)。これは典型的な都合主義といって不当でない。しかし、それだけではない。拡大された価値形態の逆転に際して突如として交換過程を導入されるが、そもそも一商品とそれ以外の多数商品との間では欲望対象の不一致からいって諸商品の交換行為は完全には成立しないというのが、久留間氏の持論であったはずである(同上、236-9ページ)。従って、氏のかねてからの自説からすれば、拡大された価値形態そのものの成否がさかのぼって検討されるべきである。
- (7) 古典派経済学説にあつては、拡大された交換取引のつきあたる困難の原因が「交換価値の発展」(*Kritik*, S. 36)にある事実の閑却があるとマルクスは指摘している。これは、事実上、使用価値同士の交換の困難性に着目する古典派に対して、全面的商品交換の矛盾を使用価値としての全面的実現と価値としての全面的実現との間の関係として把握すべき正鵠を突いたものである。
- (8) 久留間『価値形態論と交換過程論』(前掲)、18ページ。

二 貨幣形成と恐慌の抽象的可能性

前節でみたように、全面的な商品交換の中では、使用価値としての全面的実現と価値としての全面的実現とが互いに排除しあい、結局その全面的な商品交換が成り立つためには、どれか一商品が一般的等価形態に立つべきであるのに反して、すべての商品がそれぞれの特種な使用価値を理由にそこに立つとうとして角逐しあい一つ残らず除外される羽目に陥る。それでは、全面的商品交換の矛盾は、如何なる筋道でもって一般的等価物としての貨幣形成につながり、その貨幣形成は如何にしてその母胎である全面的交換の矛盾を解決するのであろうか。本節では、先ず前半の第一段階で、全面的交換の矛盾と貨幣形成との間の脈絡を分析し、続く後半の第二段階で、直接的生産物交換と異なって貨幣によって媒介される商品変態が販売と購買との分離の可能性を含有する本源的根拠を確定する。

全面的交換の矛盾と一般的等価物としての貨幣形成との間の連繫を考察する際、どれか一商品が一般的等価形態の位置を占めるべきだというその矛盾

の一面は、貨幣形成という結果との関連で平易に理解できるとしても、すべての商品が一般的等価形態から除外されるというその矛盾のもう一つの面は、貨幣形成という事実と齟齬をきたすと映じ、理解しがたい観念にとらわれる。というのも、全面的交換の矛盾による貨幣形成とは、一般的等価形態の一般商品金への癒着がその矛盾の両面を同時に満たすという事柄に等しいからである。まさしく、一般的等価形態の金への合生は、全面的交換の矛盾の一面を充足する半面、すべての商品が一般的等価形態から除外されるというその矛盾の他面を侵犯するかのような外観を呈する。全面的交換の矛盾を極限まで押し進めて定式化した前提上での最大の難問は、金の一般的等価形態への君臨がなぜすべての商品の一般的等価形態からの排除というその矛盾の一面を充足するのかという論点にある。それでは、一般的等価形態の特定の一商品金への癒着は、なぜすべての商品の一般的等価形態からの除外という全面的交換の矛盾の一契機を満たすのであろうか。それは、一商品金の一般的等価形態の占拠によって、みずからの固有な現物形態とは別個の姿の価値形態を取得すべき必要性をもつ一般商品の身分から、その一員としての金が離脱するという厳粛な事実起因する。一般商品と貨幣商品金との相違は、貨幣の場合一般商品と決定的に違って、その現物形態そのものが生まれつき価値形態だという点にある。貨幣商品金は、その現物形態がそのまま価値形態であるがゆえに、金それ自体の出自はもともと一般商品でありながら、貨幣商品としては一般商品と画然と区別され一般商品の身分にはもはや所属しないのである。一般的等価形態からのすべての商品の除外とは、一般商品がすべて一般的等価物である貨幣でもってその現物形態とは別個の価値形態をもつことと同義である。従って、一般的等価形態の金への合生は、金がその現物形態とは別個に価値形態をもつべき一般商品の身分から一線を画す特別身分へと昇華することによって、すべての商品の一般的等価形態からの除外という全面的交換の矛盾の一面を満たすのである。

かくて、商品と貨幣とへの商品そのものの二重化は、本来成就されるべき直接的生産物交換における二つの異種の商品にとっての使用価値としての実現と価値としての実現という二重的な同時実現過程をもって、販売 $W-G$ と

購買 $G-W$ の二段階に分離させる。けだし、直接的交換 $W-W$ において、どの商品も一般的等価形態の地位を排他的に占めようと相争うビヘイビアから生まれる全面的交換の矛盾は、互いに商品として相対する個々の商品がその相反する使用価値と価値との二重性格を社会的に実証すべき必要性から発生するからである。全面的交換の矛盾を孕む $W-W$ は、相対する二商品にとって本来成就されるべき使用価値と価値との同時実現の折り重なった過程だとすれば、貨幣形成によるその矛盾の解決はその二重的な同時実現過程を相互に引き離すことになる。全面的交換の矛盾解決による W_1-W_2 の W_1-G-W_2 への推転によって、 W_1-G-W_2 の第一段階の販売 W_1-G では、先ずもって W_1 にとっての使用価値としての実現と価値としての実現とが同時達成され、次の第二段階の購買 $G-W_2$ では W_2 にとっての使用価値と価値との同時実現が行なわれ、両者の総計において初めて社会的総商品にとっての商品としての実証が完了する⁽¹⁾。貨幣が「商品の離脱した姿」(*Kapital*, I, S. 123) あるいは「商品の絶対的に譲渡可能な姿」(*Ibid.*, S. 130) であるのは、販売 $W-G$ が商品の二要因たる使用価値と価値との同時実現を含み、商品としての二重の社会的性格の実証過程だからである。 $W-G$ が単に使用価値としての実現であるならば、貨幣は単なる使用価値の離脱した姿だという帰結が生まれる。或る商品は、それ自体特殊な使用価値からなる貨幣商品金への転化によって、一面で使用価値として実現される—金という特殊な使用価値との交換による—と同時に、他面では価値として実現され—一般的等価物たる貨幣との交換による—、二重の本性を実証して一般商品から決定的に離脱するのである。全面的な生産物交換 $W-W$ は、理論上商品が使用価値としてか価値としてか一面的に存在する場合にのみ成り立ち、一商品にとって使用価値と価値との同時実現は不可能である⁽²⁾。

しかし、商品と貨幣とへの商品の二重化に伴い W_1-W_2 が W_1-G-W_2 へと編成替えすることによって、 W_1 の W_2 への姿態変換は W_1-G と $G-W_2$ という二段階の転化を要することになる代償を払いつつも、 W_1-W_2 では不可能であった一商品にとっての使用価値と価値との同時実現が可能となる。貨幣商品金の生成による全面的交換の矛盾解決は、 $W-W$ を $W-G$

—W へ分裂させるマイナス効果を刻印する反面で、W—W では不可能であった一商品にとっての使用価値と価値との同時実現を可能にするプラス効果を与えるのである。

かくして、これまでに、貨幣商品金の生成は如何にして全面的商品交換の矛盾を解決するかを一つ一つ順を追って追求したが、実をいえば、全面的交換の矛盾からの貨幣商品金の生成メカニズムのうちに恐慌の抽象的可能性の根源的な発生根拠が解かれているのである。それでは、全面的交換の矛盾が宿す恐慌の抽象的可能性の根本的発生根拠とはいったい何か。端的にいえば、それは、商品と貨幣とへの商品の二重化によって、一方の商品にとっての使用価値と価値との同時実現が他方の商品のその同時実現とは独立化して単独で達成される点にある。すなわち、直接的生産物交換 W—W にあっては、自分の生産物譲渡と他人の生産物取得とが同一の交換行為の中で同時に行なわれ、販売と購買とは直接的に同一である。別言すれば、W—W では、或る商品を引き換えにした別の商品の取得がすべての商品にとって一挙に達成され、販売と購買とが分離して全般的過剰生産が生じる余地は微塵も存在しない。W—W では、或る生産部門での過剰生産と別の生産部門での過少生産つまり社会的総労働の部門間配分ミスにもとづく部分的過剰生産がありうるにすぎない⁽³⁾。これに反して、W—G—W では、貨幣生成によって、社会の一方の極の商品群の使用価値と価値との同時実現が他方の極の商品群のその同時実現から自立的に分離してしまい、社会の中の一群の商品だけが残りの商品群とは全然別個にその二重的本性を実証しうることになる。商品の二重的本性の実証とは文字通り商品本性の自己証明にほかならない。従って、W—G で商品の商品としての基本性格の証明が完了する限りでは、商品はその完了時点で貨幣という価値の自立した姿態をとって「ひとつの独立休止点 (ein selbständiger Ruhepunkt)」(*Kritik*, S. 75) を形成しうることになる。前半の販売 W—G に接続する後半の購買 G—W つまり貨幣形態をとった最初の商品による別の商品の取得は、その反面において商品と貨幣とへの商品の二重化により先送りされた残りの商品にとってのその二重的本性の証明過程にほかならない⁽⁴⁾。通常、W—G に接続する G—W は、貨幣形態にある最初の

商品による別の商品の購買としてのみ観念される傾向が強いが、 $G-W$ は繰り延べされた残りの商品の商品としての自己証明である事実には細心の注意を払うべきである。生産物の商品という歴史的形態にとっての火急の課題は、その二重的性格の証明にあるがゆえに、貨幣商品金の成立する次元上では、商品はその商品本性を実証しうる時点でその姿態変換を休止しうるのである。マルクスによれば、恐慌の抽象的可能性を規定する際、販売 $W-G$ という商品流通の部分過程はそれ自身同時に「独立な (selbständig) 過程」(*Kapital*, I, S. 127) をなし、 $W-G$ あるいは $G-W$ はすべて「ひとつの無関係な孤立的な行為 (ein gleich gültiger und isolierter Akt)」(*Kritik*, S. 75) として存在する事実に着目しているが、ここでマルクスの力説する販売の独立性は、 $W-G$ によって商品がその商品としての基本性格の証明をほかの商品のそれとは別個に完了しうる点に由来する。購買の独立性は、販売の独立性のタテの反面にほかならない。商品流通 $W-G-W$ が販売と購買とに分離独立化しうる内奥に隠された根柢はここにある⁽⁵⁾。

以上、われわれは、本節において、全面的交換の矛盾と貨幣形成との間に横たわる一本の太い関係を詰めた上で、 $W-G-W$ が含蓄する恐慌の抽象的可能性の根源的な発生根柢を析出した。

- (1) 学界の一部には、 $W-G$ で使用価値と価値との同時実現が成就すると考えるわれわれの見解のほかに、 $W-G$ と $G-W$ とでそれぞれ使用価値としての実現と価値としての実現とが別々に達成されると解する見解や、それとは正反対に、 $W-G$ と $G-W$ とでそれぞれ価値としての実現と使用価値としての実現が行なわれるとみる見解、更には価値としての実現を自己の商品と引き換えての自分の欲望を満たす商品との交換とみなしながら $W-G$ を使用価値と価値との同時実現ととらえるちぐはぐな見解など総じて四種類の考え方がある。
- (2) 従って、全面的な直接的商品交換 $W-W$ は、そこで商品の二要因の同時的な全面的実現の達成が不可能である以上、理論上厳密に言えば成立しないのである。恐慌の抽象的可能性を規定する際、 $W-G-W$ との対比でマルクスがもちだす直接的生産物交換 $W-W$ は、価値としての全面的実現の関係を捨象した使用価値としての全面的な交換関係を指す。
- (3) 岡 稔「恐慌理論の問題点」(『資本主義分析の理論的諸問題』新評論, 1975年), 60ページ。

- (4) 『資本論』第I巻第3章第2節「流通手段」冒頭に、商品の発展は交換過程の矛盾を解消せず、その矛盾の運動が可能になる形態を創造するという周知の一文がある (*Kapital*, I, S. 118)。商品の発展が交換過程の矛盾を解消しないというのは、すべての商品がその二重的本性を形態変換によって実証すべき宿命をもつ限り—W—G—Wの完了によってのみすべての商品はその本性の証明を成就しうる事実に注意せよ—、貨幣生成の基礎でもなお全面的交換の矛盾が恒常的に再生産されるという事柄を表わす。これに対して、商品の発展により交換過程の矛盾の運動が可能になるとは、以前にはその矛盾のために行き詰まった全面的な商品交換が貨幣形成によって打開される事態を意味する。
- (5) 念のため指摘しておけば、販売と購買の分離と一口にいっても、それは最初の商品そのものが販売されない場合にも、あるいはW—Gが成功してG—Wが後続しない場合にも生じる (*Kapital*, I, S. 127)。しかし、一般的に恐慌の抽象的可能性として販売と購買の分離を規定する場合、その基本形態はW—Gが成就してなおG—Wが接続しない事態を指すと考えてよい。なぜならば、最初の商品の販売不可能性もちだすならば、W—Wの場合も同じ事柄もちだしてW—Wの分離が機械的にいえることになるからである。マルクスの次の発言は、W—Gが成り立ってなおG—Wが続行しない事態を基本にすえて恐慌の抽象的可能性を規定している事実を示唆する。「 $W^{(1)}$ は不確定の期間、さなごGのままにとどまることができるからこそ、 $W^{(1)}$ —GとG— $W^{(2)}$ とが、すなわち販売と購買とが、空間的にも時間的にも分裂しうるのである。」(『資本の流通過程』大月書店、中峯照悦・大谷禎之介他訳、33ページ)

三 恐慌の抽象的可能性と古典派経済学

(一) 古典派学説と部分的過剰生産

われわれは、前節までの行論において、全面的商品交換の矛盾の必然的所産として貨幣形成を説き、その全面的交換の矛盾の解決方法との関連でW—G—Wにおいて販売と購買との分離が発生する本源的な根拠を確定した。ところが、翻って考えれば、古典派経済学は商品流通において全般的過剰生産の可能性を否認して部分的過剰生産の発生のみを是認した根本原因が従来必ずしもはっきりしないのである。これは、交換過程における商品と貨幣とへの商品の二重化メカニズムの不分明さの反面であると推論される。全面的交換の矛盾と恐慌の抽象的可能性とは同一コインの両面の関係にあるから、

交換過程の矛盾に関する古典派とマルクスの相違にして明確であれば、全般的過剰生産の否定論が生まれる理由もまたおのずと明らかになるはずである。そこで、本節では、マルクスの解明した恐慌の抽象的可能性の理論的高みから、古典派が商品流通の中に部分的過剰生産の可能性のみを見いだす深層に照明を与える。

古典派が需要と供給との直接的同一性を信奉しセイ法則 (Say's Law) にしたがって部分的過剰生産の発生のみを認めたことは、周知の事柄に属するが、念のためそれを確認しておけば以下の通りである。

「もしもいくつかの種類の商品の滞貨、つまり過剰があるとすれば、それはこれらの商品と交換される他の商品が、交換に必要な量だけ生産されなかったからにほかならず、もしこの後の商品の生産者たちがその商品をヨリ多く生産していたならば、前の商品の生産者たちは、いまつまっている商品の捌け口をみい出すことができただろう。ひとくちにいえば、ある種の生産物が過剰だということは、他の種類の生産物が充分でないからにほかならない。⁽¹⁾」(J. B. セイ『恐慌に関する書簡』日本評論社、中野正訳、18—9 ページ)

「一国民の総需要と総供給とが決して相互に不等になり得ない如く、或特定のものに於ける過剰供給、随つて交換価値の生産費以下への下落は、他のものに於けるそれに相応する供給不足、随つて交換価値の生産費以上への騰貴を伴はずしては、決して起り得ない。」(J. ミル [1773—1836]『経済学綱要 (Elements of Political Economy)』春秋社、渡辺輝雄訳、211ページ、原書初版1821年)

「ある特定商品の生産が過多であつて、それに支出された資本を償わないほどの供給過剰が市場に起こるかもしれない。しかし、このことがすべての商品にかんして事実であることはありえない。⁽²⁾」(D. Ricardo [1772—1823] , *Principles, Works*, I, p. 292)

要するに、古典派によれば、商品売買とは、貨幣を単なる媒介項とする生産物と生産物との交換行為に帰着し、或る生産物に対する販路はそれと交換される別の生産物の生産によって形成されるという対応関係にある、だから、

或る生産物の過剰生産はその生産物の販路をなす別の生産物の過少生産を表現するにすぎず、すべての種類の生産物がおしなべて過剰生産に陥る事態は原理的にありえない、と唱えるのである⁽³⁾。われわれの理解を先回りしていえば、古典派が全般的過剰生産の可能性を否定した直接の原因は、一般的等価物たる貨幣をもって単なる生産物同士の全面的交換の技術的困難から導きだした点にある。古典派にあっては、二重的本性をもつ特殊歴史的な商品の超歴史的な単なる使用価値への変造によって、貨幣は種類の異なる生産物交換をいわば交通整理するための技術的媒介者に不可避的に転落し、ここから直線的に全般的過剰生産の否定論が引きだされる。けだし、 $W-G-W$ では「生産物を購買するものは生産物にほかならない」(J. B. セイ『恐慌に関する書簡』[前掲]、29ページ)とすれば、 $W-W$ では両者の分離独立は不可能だからである。商品を単純な使用価値に転化し、貨幣を生産物交換の媒介物と考えた典型的な論客は、リカードと相並ぶ古典派の碩学 A. スミス (1723—90) であった。すなわち、いまたとえば、肉屋と酒屋とパン屋とが社会的分業を構成して、肉屋がビールとパンを欲し、反対に酒屋とパン屋がともに肉を欲すると想定すれば、商品交換は即刻成り立つ。しかし、酒屋とパン屋とがともに肉を欲望対象とするのに、肉屋があいにくビールもパンも不要だとすれば、三者間では残念ながら商品交換は成り立たない。そこで、社会的分業によって阻害される諸商品の交換関係がスムーズに展開するために、大方の商品所有者が全面的な交換行為の中で自己の生産物との交換を拒まないと考える特定の一商品に白羽の矢が立てられ、その一商品が全面的交換を媒介する共通用具である貨幣として流通することになったのである⁽⁴⁾、と。みられる通り、スミスは、使用価値と価値との二要因から成る商品を単なる物質的財貨に一面的に解消した上で、貨幣生成の根拠を商品所有者間での全面的交換の不成立という困難性に求めるのである。しかし、ここで、商品それ自体が単なる使用価値に一面化される弊害をもつと同時に、使用価値同士の全面的交換の不成立から貨幣が選抜される以上、貨幣といってもそれは単なる使用価値——普遍的な受領可能性をもつという限定条件つきではあるが——にすぎない。従って、貨幣は、一般的受領可能性をもつ単純な使用価値として、社

会的分業のために生じる全面的交換の不成立という不便を取り除く技術的媒介物でしかない。そうであるとすれば、商品流通 $W-G-W$ は実質的には直接的生産物交換 $W-W$ に等しいことになる。まさに、全面的交換の矛盾の古典派に特有な把握から「商品流通と直接的生産物交換との相違の単純な捨象による両者の同一視」(*Kapital*, I, S. 128) が生まれたのである。商品流通が異質な使用価値同士の取り換えを純粋に表わすとすれば、その単純な生産物交換では販売と購買とは直接的に同一であるから、すべての商品が一樣に過剰生産に陥るという事態はありえない。「直接的な物々交換の場合のように、すなわち購買と販売とは一致するのだとすれば、このような前提のもとでは恐慌の可能性はなくなってしまう。」(*Mehrwert*, II, S. 509, 圏点—マルクス) しかし、全般的過剰生産は不可能であるとしても、古典派は、もちろん日々の市場価格変動となって現象するような異なる生産部門の生産の不均衡は承認する。けだし、貨幣形成によって異質な使用価値同士の全面的な交換は完全に成り立つと仮定しても、「流行の変化」(D. Ricardo, *Principles*, Works, I, p. 90) などから起こる「需要変動のあらゆる事情」(*Ibid.*, p.89) のため、「個々の生産部面への社会的労働の配分における不均衡」(*Mehrwert*, II, S. 521 ページ) は回避しがたい性格をもつからである。

それゆえ、これまでの考察からすれば、全般的過剰生産の可能性に関する古典派とマルクスの相違の由来は氷解する。資本主義生産を生産形態の未来永劫にわたる絶対的様式とみなす既成観念に災いされて⁽⁶⁾、古典派は、貨幣をもって単なる生産物の全面的交換の直面する困難性を除去する技術的用具と考え、その理解を直接的な根拠として $W-G-W$ を貨幣によって成り立つ生産物交換と同一視し、 $W-G-W$ から全般的過剰生産の可能性を放逐したのである。これに反して、マルクスの場合には、商品は使用価値と価値との「内在的な矛盾」(*Kapital*, I, S. 128) をもつとみる歴史的な立場から、貨幣をもって使用価値としての全面的実現と価値としての全面的実現との間の矛盾の社会的な賜物として導きだし、貨幣形成によって社会の一方の極の商品群の商品本性の実証が他方の極の商品群のそれから分離独立化する事実に依拠して $W-G$ と $G-W$ との分裂の可能性を析出したのである。従って、全般的

過剰生産の可能性の認否如何は、いつにかかって全面的商品交換の矛盾把握に依存している。貨幣をもって社会的分業に起因する単なる生産物交換の技術的困難性から引きだすならば、 $W-G-W$ は貨幣の介在に反してもろくも生産物交換に墮してしまい、部分的過剰生産のみが肯定されるという否定的結末が生まれる。反対に、それ自体としては使用価値としての全面的実現は完全に成り立つと想定して、使用価値としての全面的実現と価値としての全面的実現との関係に交換過程の特殊歴史的な矛盾を発見してその解決方法として貨幣を引きだせば、 $W-G-W$ で社会の一方の商品群と他方の商品群の商品本性の実証が互いに切り離され、全般的過剰生産の可能性が主張できることになる⁽⁶⁾。それだから、古典派による全般的過剰生産否定の根拠づけは、マルクスの洞察した全面的交換の矛盾の解決との対比において初めて得心のゆく回答が得られる。古典派は曲りなりにも $W-G-W$ の G を流通手段として把握したのであるから、貨幣を生みだす全面的交換の困難の性格にまでさかのぼってのみ全般的過剰生産の否定論の内奥がその全容をあらわすのである。外面上 $W-G-W$ の G を流通手段と規定する点では古典派もマルクスも同一であるから、商品流通それ自体の論理次元上に留まる限りでは、恐慌の抽象的可能性に関する両者間の明快な相違点は特定されえないのである。

以上、われわれは、本節において、マルクスの証明した恐慌の抽象的可能性の観点から古典派学説を逆照射し、古典派が貨幣を流通手段としてとらえた点でマルクスと外観上の同一性をもつ半面、全面的な生産物交換の困難性を技術的に解除する用具として貨幣を導きだす帰趨として全般的過剰生産の否認にゆきついた理論的足どりを考察した。

- (1) 「或る種の生産物が過剰なるは他の生産物に不足を来せるに因るものなり。」(J. B. セイ『経済学 (*Traité d'Economie Politique*)』上巻、岩波書店、増井幸雄訳、308ページ、原書初版1803年)
- (2) マルクスはリカードによる全般的過剰生産の否定について次のように規定している。「リカードもまた、個々の商品については供給過剰を認めるのである。不可能なことは、市場の同時的な一般的供給過剰だけである、と言うので

ある。だから、なにかある特殊な生産部面についての過剰生産の可能性は否定されていない。」(Mehrwert, II, S. 530, 圏点—マルクス)

- (3) 古典派とは根拠は相異なるが、宇野弘蔵氏は、生産部門間の不均衡の価格による調整機能から販売と購買との分離は解消可能として、恐慌の抽象的可能性を否認される。「私も嘗てマルクスにならって、ここに恐慌の可能性をあげたのであるが、それはむしろ無用のことであった。」(『経済学方法論』東大出版会、1962年、231ページ) 販売と購買との分離の可能性は、社会的総労働の均衡のとれた配分の前提上での規定であることに注意されてよい。
- (4) *The Wealth of Nations*, chap. 4 参照。J. B. セイにも貨幣=単なる交換の媒介物という考え方の明言的な叙述がある。「販売も購買も、じっさいには、生産物の交換にほかならない…。人は販売用であってみずからは必要としない生産物を、その人が購買し利用せんとするところの生産物と交換するのです。貨幣は目的ではなく、単に交換の媒介物たるにすぎません。」(『経済学問答 (Catéchisme d'économie politique)』現代書館、堀経夫・橋本比登志共訳、68ページ、原書初版1817年) リカードの場合、更に発展して、流通手段としての金属貨幣を価値章標としてとらえ、その流通法則から貨幣数量説を提唱することになったのである。「諸商品の価格が、貨幣の増減に比例して上下するであろうということを、私は、議論の余地のない事実として前提する。」(*Principles*, Works, III, p. 193)
- (5) 「リカードにとっては、資本主義的生産様式は社会的生産の自然的かつ絶対的な形態である。」(マルクス『資本の流通過程』[掲掲], 290ページ)
- (6) 従って、古典派とマルクスとは、直接的生産物交換 $W-W$ と商品流通 $W-G-W$ とに対する過剰生産の考え方は正反対で完全にクロスしていることになる。

古典派	{	$W-W \sim$ 全面的交換不成立 $W-G-W \sim$ 部分的過剰 生産の可能性	マルクス	{	$W-W \sim$ 全面的交換成立 $W-G-W \sim$ 全般的過剰 生産の可能性
-----	---	---	------	---	--

逆立ちしたヘーゲルに対してと同じように(*Kapital*, I, S. 27), マルクスは、物々交換の全面的不成立と商品流通における全面的過剰生産の否定という古典派固有の学説をとともに根底から覆したのである。

因みに、マルクスの場合、直接的生産物交換の全面的成立は、交換行為における相異なる生産物の譲渡と受け取りとの直接的同一性命題(*Kapital*, I, S. 127, *Mehrwert*, II, S. 509) と裏腹の関係にある。従って、直接的生産物交換の全面的成立が保証されるとすれば、商品生産における生産の不均衡要因としては生産諸部門間への社会的総労働の配分の如何だけが残ることになる。全面

的生産物交換の成立とそこでの社会的総労働の不均衡配分とは両立する。W-G-W が W-W に還元されれば、部分的過剰生産だけが自動的に肯定されるがゆえに、マルクスは、W-G-W の W-W に対する差別性を概念的に分析して、W-G-W と恐慌の抽象的可能性との内的結びつきを究明したのである。

(二) 恐慌の抽象的可能性と古典派学説の再版

われわれは、前項において、古典派が貨幣を直接的生産物交換の困難性から導出しつつ商品流通における販売と購買との分裂の可能性を否定するに至った顛末をたどった。ところが、わが国学界では、一方で事実上欲望対象の不一致からの貨幣生成を主張しつつ、他方で恐慌の抽象的可能性を唱える木に竹を接合するような見解が少なからず見受けられる。A. スミス流の貨幣生成論を継承してスミスとマルクスとを重ね合わせる一部見解の特色は、マルクスによる全面的商品交換の矛盾規定を欲望対象の不一致による交換の不成立として後向きに改作する点にある。交換過程の矛盾が欲望対象の不一致による交換の不成立として改造されるポイントは、直接的には価値としての実現という概念の取り違えに由来するが、究極的には、商品の単なる使用価値としての一面的な理解にある。そこで、本項では、交換過程の矛盾をもって全面的な生産物交換の困難性と混同する見解をその発生原因にまでさかのぼって検討した上で、恐慌の抽象的可能性は、全面的生産物交換の行き詰まりから貨幣を導くスミス流の論法の上には聳立しえない事実を結論する。

既述の通り、商品の使用価値としての実現に対応する価値としての実現という概念は、前者が使用価値の社会的有用性の実証を表わすのに対して、価値としての普遍的な現象形態の取得を表わす。ところが、A. スミスのいう全面的交換の遭遇する困難性をもって交換過程の矛盾と等価とみなす代表者の一人である泰斗久留間鮫造氏は、使用価値としての実現を自己の商品の社会的有用性の実証と考える一方、価値としての実現を自分の商品と引き換えての自己の欲望対象とする相手方商品の入手と解される。だから、交換過程のスミス流解釈にあっては、商品交換は、自分の商品の使用価値の社会的有用性の実証と自分の商品と引き換えでの自己の欲望を満たす相手方商品の取得

という二つの要素から構成されることになる。そこで、久留間氏によれば、交換過程には以下のような矛盾が存在すると主張される。いま亜麻布所有者とパイプル所有者とがいて、前者はパイプルを所望しているがパイプル所有者の方では酒との交換を欲し、亜麻布との交換は小麦所有者の願望であると仮定すれば、交換関係は成立しない。ここで亜麻布は小麦所有者の欲望対象であるから、社会的に有用な労働支出として価値形成しているのにパイプルと交換されず、従って、「亜麻布は価値として実現されるわけにいかない。」(『貨幣論』[前掲] 237ページ) 亜麻布は、それが価値として実現されない限り、小麦所有者の手に移らず、使用価値として実現されることもない。ところが、貨幣が生成すれば、交換 W_1-W_2 は販売 W_1-G と購買 $G-W_2$ に分裂して、亜麻布所有者は販売 W_1-G で先ず亜麻布を使用価値として実現し貨幣を入手する。続いて、購買 $G-W_2$ において、入手された貨幣を価値として実現して自己の欲するパイプルを獲得する⁽¹⁾。 W_1-W_2 が W_1-G-W_2 に転化すれば、「商品の社会的使用価値としての実証の必要が $W-G$ の過程において独立化して現われる」(同上、239ページ、圏点—頭川)ことになる⁽²⁾、と。

そこで、使用価値としての実現と価値としての実現との間の矛盾がなにもゆえに全面的生産物交換の不成立として理解されるのかという疑問がただちに発生する。先刻先回りして指摘したように、それは、直接的には、価値としての実現をもって交換手段としての自己の商品と引き換えでの相手方商品の入手とみなす恣意的な自己了解による。使用価値としての実現は、 W_2 所有者によって W_1 を欲望対象とされる関係の成立を表わし、価値としての実現は、 W_1 所有者によって W_2 が欲望対象とされる関係を表現するとすれば、使用価値としての実現と価値としての実現との排除関係は、二人の商品所有者間での欲望対象の不一致を意味することになる。しかし、全面的交換の矛盾がスミス流に理解される根幹には、商品を単純な生産物に解消する古典派と同じ通念がある。というのも、その全面的交換の矛盾の第一規定の解釈が示す通り、そこで、商品は、交換過程上に価値形態をもたずにその現物形態のみで登場すると主張されているからである。その第一規定で、二人の商品所有者

間での欲望対象の合致如何が商品の矛盾の展開と理解される限り、商品にとってその現物形態とは別個の価値形態の取得は全然問題にならない。字面上はスミスには存在しない価値としての実現という概念をもちだされるが、スミスとの相違は単なる表面上の外観にすぎない。従って、全面的交換の矛盾の取り違えは、根源的には、特殊歴史的な存在である商品の使用価値への古典派と同じ単純化に起因する。生産物交換の困難性をもって交換過程の矛盾とみなす見解は、スミス流の古い誤りが新しい衣装をまとして再現したにすぎない⁽³⁾。

ところが、商品が使用価値に解消されスミス流の生産物交換の困難性から貨幣生成が説かれれば、恐慌の抽象的可能性は $W-G-W$ から理論上蒸発してしまうことになる。貨幣は単なる生産物同士の交換を円滑化する流通の媒介用具にすぎず、 $W-G-W$ は本質的に直接的生産物交換に等しくなるからである。従って、全面的生産物交換の不成立から貨幣生成を説く一方で、J. B. セイの販路の理論を批判して恐慌の抽象的可能性を提唱する考え方には、繕いがたい自己矛盾がある⁽⁴⁾。古典派の販路説に恐慌の抽象的可能性を対置していくら批判的言辞を投げかけても、恐慌の抽象的可能性を規定する全面的交換の矛盾を古典派と同じに理解する限り、それは経済学の歯車の逆回転である。全面的交換の矛盾をスミス流にゆがめなおかつ恐慌の抽象的可能性を主張するのは、『資本論』の衣鉢を継ぐ所以でないどころか、『資本論』からの二重の逸脱——一つは全面的交換の矛盾理解の点で、二つにはスミス流のその理解をもって恐慌の抽象的可能性を根拠づける点で——である。全面的交換の矛盾のスミス流理解から恐慌の抽象的可能性が主張できるならば、貨幣形成論と販路の理論とは無関係だというパラドックスが生まれる。使用価値としての全面的実現を大前提にすえてなお全面的商品交換の矛盾を喝破した点にこそ、マルクスの天才的なアイデアがある。

以上、われわれは、本項において、全面的交換の矛盾のスミス流理解には商品の単なる生産物への古典派と共通する単純化の誤りがある事実を指摘した上で、スミス流の貨幣形成論と恐慌の抽象的可能性の主張との間には結合不能な埋めがたいギャップが横たわっていることを究明した。スミス流貨幣

形成論の基礎上でなお恐慌の抽象的可能性が堂々主張される現状は、恐慌の抽象的可能性の本源的発生根拠の未解明を回帰的に証明する⁽⁶⁾。

- (1) A. スミスと同じく全面的生産物交換の困難性から貨幣生成を説く文献として、K. カウツキー（1854—1938）『貨幣論』改造社、向坂逸郎・岡崎次郎共訳、ソ連邦科学院経済学研究所『経済学教科書』（改訂増補第四版）第一分冊、合同出版 などがある。
- (2) W—G と G—W ではそれぞれ使用価値としての実現と価値としての実現が達成されるという一部の見解は、商品流通において商品と貨幣とがおのおの実在的には使用価値と価値とを代表するという周知の事実によって補強されていると推測される（久留間『貨幣論』〔前掲〕234—6 ページ）。商品の使用価値と価値との内的対立は商品と貨幣との外的対立関係として表現されるが（*Kapital*, I, S. 75-6）、これは使用価値と価値との実現が別々に相前後して成就されるという主張を裏づけない。なぜならば、金が一般的等価形態を占拠して価値の自立的な姿態へ昇華することによって、ほかのすべての商品は、使用価値の社会的有用性の実証のみならず、一般的な価値表現をも可能にする社会的様式を得ることになるからである。
- (3) 「マルクス経済学レキシコンの栞」No.11（大月書店、1980年）には、『経済学批判』の一節を引用しての A. スミス流貨幣形成論の再生産という久留間説批判に対する反論がある。すなわち、『経済学批判』の或る箇所、マルクスは以前の貨幣学説史を回顧して以下のようにいう。貨幣は、「交換価値の発展」に規定される交換取引の困難から生まれるのに、旧来の経済学者は貨幣を交換取引が直面する「外部的な諸困難」から説明する。たとえば、「商品は使用価値としては任意に分割可能ではないが、交換価値としては任意に分割可能でなければならない」とか、あるいは「Aの商品はBにとって使用価値でありうるが、Bの商品はAにとって使用価値ではない」とか、更には「商品所有者たちが互いに交換しようとする分割できない商品を等しくない価値比率で需要することがありうる」（以上、*Kritik*, S. 36）というようにである。その意味では、古典派経済学にとって、貨幣は交換過程が内蔵する不便に対処するために巧みに考案された技術的方便にすぎない。ただし、従来古典派の説明には、「使用価値と交換価値との直接的統一としての商品の定在が包み隠している矛盾のいくつかの側面」（*Ibid.*）が具体的に示されているが、と。そこで、久留間氏は、最後の一文の古典派に対する肯定的とも見える寸評から、スミスの不十分さは欲望対象の不一致による交換の不成立を指摘した点であるのでは全然なくて、「物々交換の技術的不便」（「マルクス経済学レキシコンの栞」〔前掲〕6 ページ）を商品の二要因との関連で「商品に固有な矛盾の一つのあらわれ」（同ページ）

として把握しなかった点にあると反駁される。しかし、問題の叙述の基調は古典派の貨幣形成論の外在性の指摘にあるから、スミスとマルクスとの実質的な同一視は肯けない。マルクスの古典派評価は、交換過程の矛盾の外在性や商品の使用価値への解消という基本欠陥を押さえた上で、古典派の言説には部分的に商品の二要因に触れている場合があるという限定的なものにすぎない。先に引用した古典派による欲望対象の不一致に関する指摘は使用価値の面にのみかかわるが、使用価値の分割不可能性と価値の分割可能性に関する議論は商品の二要因に触れ、不平等な価値比率での商品の需要についての主張は価値の面に対する古典派なりの着眼にほかならない。こう考えれば、古典派が貨幣形成を論じる際に出した理由づけはいずれも商品の二要因に何らかのかかわりをもつことになる。なお、商品所有者が任意に分割できない商品を不平等な価値比率で需要する不便さに貨幣形成の一因を見いだす見解は、A. Smith, *The Wealth of Nations*, chap. 4 のほか、J. ミル『経済学綱要』[前掲]、114ページ、J. B. セイ『経済学問答』[前掲]、75ページにもある。

- (4) 久留間敏造『(増補新版) 恐慌論研究』大月書店、1965年、16-21ページ。
- (5) 全面的交換の矛盾をスミス流に解する半面で恐慌の抽象的可能性を提唱する論法は、価値量の労働時間による計測可能性を主張して価値概念をリカード水準に押し下げる半面で、マルクス価値論の正当性を擁護するあべこべの考え方と同じである(拙稿「価値と平均利潤法則」『高知大学学術研究報告(社会科学)』第37巻、1988年、参照)。マルクスの価値概念は、価値量の労働時間による計測可能性の主張の原理的止揚の上に成り立つのと丁度同じように、恐慌の抽象的可能性は、スミス流の交換の矛盾の否定の上に初めて聳え立つ。久留間氏にあっては、交換過程の矛盾に関してスミス流の立場を認めれば、全般的過剰生産の否定論が直線的に生まれる両者の因果関係を否認されるのは了解に苦しむ。また、交換過程の矛盾のスミス流理解に立脚する半面での古典派に対する「貨幣の本質に関する完全な無理解」(久留間『(増補新版) 恐慌論研究』[前掲]、18ページ)という指摘は、貨幣生成機構と貨幣の本質との切断にほかならない。自己の主張の基礎に対する忠実性は、科学的真理を探求する研究者にとってひとみにも匹敵する第一の要件である。自己の基礎的主張に対する首尾一貫性こそ、何ものにもまどわされず事実とロジックによって真理へ到達するためのかけがえのない拠り所でもあれば、ほかの仕事では代替しがたい研究者の魅力でもある。

四 商品変態の正常的経過と恐慌の抽象的可能性

われわれは、これまでの展開の中で、全面的交換に内在する矛盾を説き、

その矛盾の貨幣形成による解決によって、商品流通に恐慌の抽象的可能性をもたらす本質的な根拠は、社会の一方の商品群の使用価値と価値の同時実現が他方の商品群のそれに対して分離独立して達成される点にある旨議論を詰めた。しかし、以上の行論では、恐慌の抽象的可能性に関して未解決の一論点を積み残したままの状態にある。それは、マルクスが商品変態の正常的経過を前提にしつつ、その前提条件とは正反対にみえる販売と購買との分離の可能性を規定している逆説的な事実にある。そこで、大詰めをむかえた本節において、商品変態の正常的経過の想定と恐慌の抽象的可能性との論理整合性を分析する。

マルクスは、「恐慌の可能性」(*Kapital*, I, S. 128) を『資本論』第I巻第3章第2節 a「商品の変態 (die Metamorphose der Waren)」で論じているが、その際あらかじめ次のように前置きしつつ $W-G-W^{(1)}$ の中に恐慌の抽象的可能性を見いだす。「分業 (die Teilung der Arbeit) は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然にする。同時に、分業は、この化体が成功するかどうかを偶然にする。とはいえ、ここでは現象を純粹に考察しなければならない、したがってその正常な進行 (normaler Vorgang) を前提しなければならない。」(*Ibid.*, S. 122)

そこで、商品変態の正常的経過という前提条件は、販売と購買の分離と文字通り正反対の想定であるから、恐慌の抽象的可能性規定は商品変態の正常的経過という前提と対立する場違いの記述ではないかというごく初歩的な論点にぶつかる。商品変態の正常的な進展とは、販売と購買とが内的統一性を保持する事態であるから、恐慌の抽象的可能性の考察は、それが規定される商品変態の正常的経過という前提条件との脈絡を解かない限り完結しない。ここで、両者の隠された関連を考える場合、マルクスは恐慌の抽象的可能性を規定するためにむしろ積極的に商品変態の正常的経過を想定したと逆に問題設定すれば、かえって問題は解きやすくなる。それでは、恐慌の抽象的可能性を理論的に構築するために、商品変態の正常的経過を想定した秘められた理由とはいったい何か。われわれの考え方は、以下に明示する通りである。先ず最初に、商品変態の正常的な経過の想定とは、商品の姿態変換そのもの

を価格変動や商品の販売不能などの外部要因に影響されずに純粹に設定することに等しい事実を銘記すべきである。そうすれば、その正常的な経過の前提によって商品の姿態変換が純粹に表現される $W-G-W$ では、 $W-W$ とは根本的に異なって、社会全体の商品群の二重的本性は、 $W-G$ と $G-W$ という二段階にわたる変態によってのみ実証されるという事実があぶりだされることになる。社会全体の商品群の二重的本性の実証が $W-G$ と $G-W$ の二段階を経て初めて完了するという事実は、一方の商品群の二重的本性の実証が他方の商品群のそれから分離独立化する可能性をもつことを意味する。従って、恐慌の抽象的可能性が説かれる際、商品変態の正常的経過が想定される理由は、社会全体の商品群の二重的本性の実証が二段階にわたって行なわれて初めて完了するその特性把握によって、 $W-G-W$ という独特の運動形態そのものが本源的に販売と購買との分離の可能性を内包する点を明確化するためである。商品変態の正常的経過の前提は、販売と購買の分離が使用価値と価値の同時実現を達成する社会的商品群の二極化に由来する関連を浮き彫りにするための理論装置である。商品変態の正常的経過といえば、人はとかく販売と購買との相互依存性にのみ固執しがちな傾向をもつが、それではマルクスがその想定にこめた意図はスポイルされることになる。むしろそれとは逆に、商品変態の正常的経過の想定に託したマルクスの主眼点は、 $W-W$ に対する $W-G-W$ の運動形態としての差別性つまり後者では前者での販売と購買との直接的同一性が破れ、社会全体の商品本性の実証が両極分解する点の明示にある。もともと $W-G-W$ における $W-G$ と $G-W$ との内的統一それ自体、社会の商品群全体の二重的本性の実証の必要性によって規定されるものにほかならない⁽³⁾。つまり、 $W-G$ と $G-W$ との内在的統一は、最後の一商品にいたるまで残らず社会的総商品の二重的本性が実証される限りで成り立つ。従って、社会の商品群全体の二重的本性の実証は、販売と購買との二段階にわたる商品変態の単純な機械的合算において達成されるがゆえに、商品流通 $W-G-W$ は、販売と購買との内在的統一と同等な比重で両者の外的独立化の可能性を含有する。 $W-G-W$ において販売と購買との統一だけをみる見方には、商品全体の二重的本性の実証過程が二段階にわ

たる商品変態の機械的な合計から成り立つ事実の看過がある。それゆえ、総じていえば、商品変態の正常的経過が恐慌の抽象的可能性と正反対の想定にみえるのは、前者をもって販売と購買との非独立性の前提とみなす早合点による。商品変態の正常的な経過の想定は、社会の一方の商品群の二重的本性の実証が他方の商品群のそれに対して独立化する W—G—W の独自性を浮上させるための概念装置である。

以上、われわれは、本稿の最終節において、水と油のように相互に反発しあうかにみえる商品変態の正常的経過の想定と恐慌の抽象的可能性規定との間のペールで覆われたつながりを発掘した。

- (1) 資本の自己増殖運動では価値自体が商品や貨幣から独立した形態変換を遂げるように、商品流通では商品価値自身が形態運動するのではないという理由づけから、W—G—W をもって「商品変態 (die Warenmetamorphose)」(*Kapital*, I, S. 126) や「商品の循環 (der Kreislauf einer Ware)」(*Ibid.*) とする規定に対して疑問の呈示がある (宇野弘蔵『経済原論』岩波書店, 1973年, 51ページ, 鈴木鴻一郎編『経済学原理論』[上] 東大出版会, 1960年, 44—7ページ)。しかし、マルクスによれば、W—G—W は商品群全体がそれをもってその二重的本性の実証を完了する総運動であるがゆえに、商品の姿態変換だと規定される。W—G—W は、それが社会的労働の物質代謝を表わす一つのまとまりある全体運動をなすがゆえに、「商品の変態」とか「商品の循環」とか呼ばれるのではない。W—G—W が社会的労働の物質代謝であるのは、W—G—W を完了して初めて商品総体が商品としての特殊歴史的な二重性格を実証し終わる特有の形態運動の反面にすぎない。
- (2) ここで、社会的分業が商品の貨幣への転化を偶然的たらしめるというマルクスの発言から、使用価値同士の交換の成否如何が貨幣形成を規定するがゆえに、あたかも社会的分業が販売と購買との分離を究極的に規定するような解釈が生まれうる。しかし、欲望対象の不一致によって貨幣形成が規定されるがゆえに、社会的分業が販売と購買の分離の原因であるという理解は早計である。私的所有制下では社会的分業によって千差万別の使用価値をもつ諸商品は、使用価値と価値の二重物であることから一般的価値表現を可能ならしめる一般的等価物をもたねば、その全面的交換が成立しない。従って、私的所有制の前提上では、諸商品の一般的価値表現の必要性にもとづいて、社会的分業が一般的等価物としての貨幣形成の必然性を規定する。その意味で、社会的分業が貨幣形成を媒介項にして販売と購買との内的な統一を外的に自立化させる

のである。だから、社会的分業が欲望対象の不一致をもたらし貨幣形成を規定するがゆえに、その社会的分業が売りと買いの分離を規定する根本原因だという理解は成り立たない。

- (3) 従って、「社会的物質代謝を媒介する諸商品の形態変換」(*Kapital*, I, S. 119) とか「労働生産物の物質代謝がそれによって行なわれる形態変換」(*Ibid.*, S. 128) とかいう文言は、あくまでも商品全体の二重的本性の実証によって結果的に達成される $W-G-W$ の機能として理解されるべきである。逆にいえば、販売と購買との内在的統一は、商品生産社会が成り立つための社会的物質代謝の必要性によって直接規定されるのではない。「 $W-G-W$ の結果を見ると、それは物質代謝 $W-W$ に帰着する。」(*Kritik*, S. 77, 圏点—頭川)

む す び

われわれは、以上の展開において、全面的な商品交換の矛盾の解決方法のうち恐慌の抽象的可能性の本源的な発生根拠を解く鍵があるという問題意識から、全面的交換の矛盾にもとづく貨幣生成によって、社会の一方の商品群の二重的本性の実証が他方の商品群のそれから分離独立化する点にこそその秘密がある事実を分析した。従って、恐慌の抽象的可能性の理解は、全面的商品交換が含蓄する使用価値としての実現と価値としての実現との矛盾の厳密な把握を論理的な前提として初めて成り立つ。因みに、全面的商品交換の矛盾は、使用価値としての全面的実現関係を内包する限りで語りうるが、われわれと同様に、全面的交換の矛盾をスミス流に解する人々は、商品流通上での恐慌の抽象的可能性を議論する際には、直接的生産物交換 $W-W$ における販売と購買との直接的同一性の公理を無条件で承認する。しかし、 $W-W$ での販売と購買との直接的同一性は、全面的な生産物交換の成立に等しい。従って、直接的生産物交換 $W-W$ での使用価値同士の全面的交換の成立を認める限り、交換過程の矛盾のスミス流理解は内部から自壊することになる。交換過程の矛盾をスミス流に理解する人々は、恐慌の抽象的可能性を論じる際には、直接的生産物交換の全面的成立を主張する半面、全面的交換の矛盾を説く際にはその全面的不成立を断言するが、これこそ自己撞着の絵にかいたような事例であるといわねばならない。もし全面的交換の矛盾が使用

価値同士の交換の困難性を表わすとすれば、恐慌の抽象的可能性は直接的生産物交換 $W-W$ にこそ実在するという根本的修正を『資本論』に施す必要性が生まれる。全面的交換の矛盾のスミスの理解では、 $W-W$ と対比した $W-G-W$ に特有な恐慌の抽象的可能性は与えられないのである。恐慌の抽象的可能性を主張するための根本前提は、 $W-W$ における使用価値同士の全面的交換の成立にあるから、 $W-W$ での全面的交換の不成立を唱えれば、 $W-G-W$ における恐慌の抽象的可能性の規定はその独自のレゾン・デートルを喪失することになる。スミス流の交換過程の矛盾理解は $W-G-W$ に固有な恐慌の抽象的可能性の否定論である。全面的交換の矛盾のスミスの理解に立つならば、人は、古典派にならって、全面的 $W-W$ の不成立と貨幣形成による $W-G-W$ での部分的過剰生産の可能性を主張するのが本筋である。その意味では、 $W-G-W$ に固有な恐慌の抽象的可能性を定立するには、スミス流の交換過程の矛盾理解はそのパラダイムを抜本的に転換する必要がある。マルクスが古典派を超越して獲得した全面的生産物交換の成立命題は、全面的商品交換の矛盾を構成する一要素であるのみならず、 $W-G-W$ に特有な恐慌の抽象的可能性をも同時に与えるのである。ここに、本稿のライトモチーフ (Leitmotiv) の一つがある。